

# 新たな交ぜ書きの諸相

## —用法の類型化とその産出過程に関する認知意味論的考察—

吉田 敬

### 1. はじめに

日本語は、漢字とひらがなを中心に、これにカタカナやアルファベット<sup>(1)</sup>などの文字種をも加えた、「漢字仮名交じり文」によって記される。「交ぜ書き」や「当て字」などの独特な表記法も、この世界的にも特異な表記体系のもとで発達したものである。これらの表記法が、漢字の使用に関わるものであることからわかるとおり、漢字が日本語表記においてとりわけ重要な役割を果たしていることは言うまでもない。漢字によることば遊びのような文字表現を目にすることが少なくないのもそのためであろう。たとえば近年では、外来語やカタカナ語などの一部を意図的に漢字に変換した用例なども確認できる。その機能的、形態的特徴から見ると、それは当て字としての性格を有した新たな交ぜ書きとも言えよう。

本稿は、こうした語の表記の一部に任意の漢字が充当され、一語内において文字種の混在が生じている用例を取り上げ、その用法について考究するものである。下ではまず、漢字の使用に関わる交ぜ書きと当て字について概観し、本稿が対象とする用例と分析の視点を定めていく。次に実際の用例を挙げ、文字の機能の面などから用法を整理していく。それらを踏まえ、最後に、こうした表記語が生じる背景について、ことば遊びに関わる種々の観点から総合的な考察を加える。

### 2. 本研究の対象

本節では、漢字の使用に関わる表記法である交ぜ書きと当て字について確認し、漢字に対するこの両者の態度の違いを明らかにしながら、本稿で扱う用例を定めていく。

前田・阿辻 (2009, p.402) によれば、交ぜ書きとは「漢字で書ける熟語を「常用漢字表」(1981(昭和56)年内閣告示・訓令)に則って表記する際、語の一部に表外漢字や表外音訓が含まれる場合にとられる対処法の一つで、その部分だけを仮名書きする方法」のことであり、たとえば、「動悸」を「動き」と書く類のことをいう。また、このように表記された語は「交ぜ書き語」と称されるという(田部井, 2006, p.10)。

一方、笹原 (2010, p.892) によれば、「本来的、一般的な字音や字訓、字義に従わずに語の表記が行われることがあり、その際、語の「成り立ち、意味や発音にそぐわない漢字が用いられることもある」が、「そういう表記・用法を当て字とよぶ」という。当て字には、字音や字訓、字義、字形を利用したものがあり、「型録(カタログ)」のように、字音、字訓、字義が併用されたものも存在する(同上, p.895)。

このように、漢字の使用に焦点を向けた場合、交ぜ書きには、表語文字の漢字を表音文字の仮名に変えるという減算的な姿勢が、当て字には、表語文字としての漢字の機能を積極的に利用して表記しようとする加算的な姿勢が見て取れる。

上述のとおり、近年しばしば見られるようになっている用例には、形態的には交ぜ

書きに準じた性格を有しながら、機能的には当て字のそれを有するものがある。本稿では、こうした事情に鑑み、従来の交ぜ書きのように減算的な漢字使用ではなく、字音や字訓を利用しながら、漢字表記を持たない語や漢字以外の文字種で書かれることの多い語に対して、部分的に、しかし積極的に漢字が用いられた用例を扱う。したがって、「攻撃」を「口撃」と表記した語のように、二字漢語などにおいて、その一部の字種を変更することで表記されたものは文字種の混在が生じていないため、本稿では扱わないこととなる。また、もとの語が一語であるものを対象とし、「老いるショック」

（『東京新聞』、2021年1月1日付朝刊）のように、それが複数の語によって形成されたもの（オイル+ショック）や、「飲みニケーション」のように、もとの語形（「コミュ」）とは音韻的な違いの大きい漢字（「飲み」）を当てた用例も対象外とする。

一方、「ビーナス」と「ヴィーナス」、あるいは「ウイルス」と「ウィルス」、またはアルファベットの太文字と小文字のように、ゆれの生じやすい音韻や拍、文字の対立によるものは互いの類似性を認め、それぞれ両者の区別はせずに対象に含める。また、もとの語が一語であれば、語の一部に対して任意の漢字を当てた結果、外見的には漢字が送り仮名を連ねたようになっているものについても取り上げることにする。たとえば、後掲の「円らな」を「粒らな」、「美しい」を「鬱くしい」のように書く用例などである。このような用例の場合、残存部分の文字（列）の働きは、従来の送り仮名のように漢字の誤読を防ぐためにあるというよりも、ある程度の語形を保持させることで、もとの語義を残そうとするためにあるものと言え、こうした用例を含めることにより、この種の新たな交ぜ書きの全体像が見えやすくなると考えられる。なお、このような用例では、もとの語は一語であるため、変換後の漢字（二字漢語なども含む）とそれに続く送り仮名に準じた文字（列）についても、両者を合わせて一語と見なすことにする。

### 3. 本研究の方向性

本稿の対象が、音韻的な類似性を利用し、語の一部にだけ任意の漢字を充当するという、独特な特徴を有していることからわかるように、この種の文字表現はことば遊びとしての側面がある。ことば遊びの一種である駄洒落などの言語表現は、常用的なものでなく、適所においてアクセント的に用いられることが多いものである。これらは概してインフォーマルな場面において用いられるものではあるが、使用場面が一樣に決まっているわけではないため、本稿が対象とする文字表現についても、これを使用実態の面から明らかにしようとする場合は、個々の用例をもとに、まずは帰納的に追究していくことが不可欠となる。したがって、本稿においても、実在する用例を最初から体系立てて網羅的に収集しようとするのではなく、実際に確認できる用例を取り上げながら探索的な検討を行っていくこととする。

ところで、文字の機能は大きく表音と表意に分けられるという（樺島・続木・関口、1985, p.10）が、文字の基本的な働きが、表音と表意という方法によって表語することにある（亀井・河野・千野、1996, p.1342）とすれば、この新たな交ぜ書きの用法は、文字のそうした表音性や表意性の面から検討すべきだと考えられる。よって、用例の分析に関しても、この種の交ぜ書きが漢字の表音性や表意性を利用することで具

現化していることを踏まえたうえでなされることが要求される。表音性の利用については、この交ぜ書きが語の一部と漢字との音韻的な類似性のもとで成り立っていることから明白であるが、これによって、もとの語形を損なうことなく、すなわちその語義を保ちながら、そこに新たに漢字の字義を付加するという表意性の利用が認められる点にも留意する必要がある。こうしたことが、次節において、もとの語と漢字との意味的な関連性を分析の主たる視点に据える背景にある。

以上のことから、次節では、実際の用例を文字種の組み合わせごとに取り上げ、もとの語の語義とその語の一部に当てられた漢字の字義との関連性からその特徴を分析していく。なお、以下でいう「交ぜ書き」とは、原則として本稿で対象とする上述のような語の表記のことを指すが、特に従来の交ぜ書きとの混同を避ける必要がある場合、この特殊な書き方、すなわち、もとの語の一部と音韻的に同じ、または類似した読み（音）を持つ漢字をその部分の表記に用いた結果、形態的には交ぜ書きに準じた性格を有しながら、機能的には当て字のそれを有する語表記の仕方を「新交ぜ書き」、その表記語を「新交ぜ書き語」としている。

#### 4. 用例の分析

本節では多様な媒体から収集した用例を上記の観点から分析していくが、それらの用例は、形態的な側面においては、文字種の組み合わせによって大きく3つに分けられる。①主としてひらがなで書く語の一部に漢字を当てたもの（漢字／ひらがな形）、②カタカナで書かれることが一般的、あるいは通俗的にはカタカナで書かれることも少なくない語の一部に漢字を当てたもの（漢字／カタカナ形）、③原語のつづりのまま、アルファベットで表記された語の一部に漢字を当てたもの（漢字／アルファベット形）である。

用例は、いずれの形態においても、それぞれの漢字の持つ読みを利用し、語形は維持しながら、もとの語に漢字の意味を加えているものである。その用法は、両者の意味的な関連性によって、双方の類似した意味が重なり合う「重複型」、同じ文脈内で互いに、あるいは一方が他方を要求しやすい「共起型」、意味的に両者がおおむね対照的な関係にある「相反型」、一般的に両者の間に関連性の認められない「自由型」に分けられる。下では、実際の用例を挙げ、形態ごとにこうした観点から新交ぜ書きによる効果を分析していく。なお、文中にある下線は対象となる表記語を明示するために筆者が引いたものである。

##### ①漢字／ひらがな形

このタイプは、和語を中心として、もともと漢字表記をもたない副詞の類に比較的多く見られる。あるいは、漢字表記を含む形容詞類においても、その漢字を、それと同じ読みを持つ別の漢字に変えた形で用例が散見される。すなわち、純粹に語のひらがなの部分に同じ音の漢字を当てる場合と、漢字と送り仮名からなる語に対して別の漢字を当てる場合に大別される。後者の場合、当てた漢字の読み方に応じて送り仮名に準じた文字（列）を調整することがある。

次の用例では「たっぷり」という副詞の語頭が漢字に変えられている。

(1) 天然酵母の美味しいピタパンにスパイスサラダのチキンを多〜っぷりイン！

これは、「たっぷり」の「た」と、漢字の「多」の表音的な類似性（同一性）を利用し、その部分を漢字表記に置き換えた用例である。「たっぷり」と類似した意味を持つ「多」という漢字を用いることで、もとの語義を際立たせている。その意味的な関係性からは重複型と言える。「たっぷり」と「多っぷり」の読み方は同じため、音声的には両者の違いは生じないが、記された文字（列）を見ると両者の違いは明白であり、文字言語ならでは言語表現と言える。なお、この用例では、溜めを作ることで「(チキンが) たくさん」ということを強調するため、「多〜っぷり」という具合に「〜」が併用されているが、ここでは便宜的に「多っぷり」という表記語として扱う。

また、次のように、擬音語・擬態語などの疊語の場合、その一部に充当された漢字も規則的に繰り返して用いられる。そのため、語頭と語中にそれぞれ同一の漢字が配される。

(2) この未完成で不完全な理論と共に日々の 習慣に変調をもたらし、それぞれの解釈 による行住坐臥の実践日々のワクワクに 繋がるように、そして自分の中から 何かが湧く楽しみに粹組みを外しながら 湧く湧くしていきましよう！！！！

(2) では、その文脈から、「何かが湧く楽しみ」に掛けて「わくわく」という副詞を「湧く湧く」と表記していることがわかる。これも、(1) のように、類似した意味を重ねようとする重複型の用法と言える。これらの用例では、語の一部に漢字を配した結果、それに後続する文字（列）が送り仮名のように見えるものとなっている。

このように、通常この①のタイプは、漢字表記を持つ語の少ない品詞（副詞など）において現れやすいものだと思われるが、下に示すとおり、他の品詞においてもしばしば見られる。次は、上の2つとは異なり、もともと送り仮名を伴う語における新交ぜ書きの例である。

(3) シジミのように目が粒らなあなた！一重のあなた！アイメイクで悩んでいませんか？メザイク等のアイプチ用品、付けまつげで誰でもばっちり二重に！

(3) では、「円らな」という形容動詞（ナ形容詞）を「粒」という漢字に変えて書くことで「シジミのように小さな目」ということを表していると考えられる。このように、この「粒らな」は、その原形である「円らな」の語感を生かしてはいるものの、「丸みがあってかわいらしい」といったことを意図したものとは考えにくい

め、ここでは自由型となる。この用例では、もとの語の漢字（「円」）に後続する送り仮名はそのまま残しながら、漢字表記される語頭部分だけ別の漢字（「粒」）に変更されている。こうして表記された「粒らな」の送り仮名を模したひらがなの部分（「らな」）もやはり、もとの語形を保持する性格が強いと思われる。

この類の用例は、次のように形容詞（イ形容詞）にも見られる。ただし、(3)とは異なり、この用例では、語頭に当てた漢字の読みに合わせて後続する仮名の文字列を調整している点に違いがある。

- (4) ただ美しいだけのドールではなく、異形を掛け合わせることで陰鬱なのにどこか神秘的な独創的と表現するに相応しい清水さんならではのゴシックワールドを築かれています。〔中略〕

「鬱くしい」<sup>(2)</sup>

と表現したくなる清水真理さんの作品には多くのドールファンがついています。

文脈から、これは、「鬱くしい」という表記によって、もとの「美しい」の意味合いを残しながらも、陰鬱さを感じさせる様子を描写しようとしているものと思われる。つまり、この用例は、もとの語にある漢字を、同じ読み方をする別の漢字と入れ替えることで、もとの語にはない意味が加えられたものと言える。もとの語（「美しい」）と漢字（「鬱」）との間にはつながりはなく、文脈からは、むしろ両者を対比させていることが窺えるため、相反型の用法と考えられる。

また、次のように、新交ぜ書きで用いられる漢字は単独とは限らず、二字漢語などの漢字語による場合もある。

- (5) 〔前略〕「校閲で漢字の字源について書かないか」という話がきた。タイトルは「漢字んな話」。

この用例では、「肝心な」という形容動詞（ナ形容詞）の最初の3拍（「かんじ」）の部分に同じ読み方をする「漢字」という漢字（二字漢語）を当てつつ、もとの「肝心な」と同じ語形となるよう、それに送り仮名のように「んな」を後接している。ただし、この用例で当てられた「漢字」という漢字（二字漢語）の汎用性は低く、この「肝心な」のような限られた語としか結びつかないと考えられる。「漢字んな」は、「肝心な」ということばをもじりつつ、「漢字の」といった意味を加えたものと考えられるが、両者の間に関連性はないため、自由型の用法と言える。

また、用いる漢字によっては、品詞に関わらず、この種の表記語を生産しやすいものもあると思われる。次はそうした形容動詞（ナ形容詞）の用例である。

- (6) 一見汚くてゴチャゴチャしているんですが、リアルな汚さじゃないので、

おしゃれ感が漂ってきます。まさに「汚しやれな部屋」ですね。

(6) では、「おしゃれな」を「汚しやれな」と表記することで、この一語によって、混沌としていながら洗練とした部屋の様子が描写されている。これは、今日しばしば見られる、意味合いのかけ離れた 2 つの意外な形容詞類の組み合わせからなる語形成に類似している。たとえば、「あざとい」と「かわいい」を掛け合わせた「あざとかわいい」などである。このように、近年では主として形容詞類において、複数のそれが意外性のある組み合わせによって新たな語を作り出すことがあるが、(6) も「汚い」(形容詞＝イ形容詞)と「おしゃれな」(形容動詞＝ナ形容詞)という 2 つの形容詞類の混成である点においてそれと類似している。もっともこの用例の場合、語形(「おしゃれ」)に変化はないため、その文字面によって視覚的に表現されたもの(「汚しやれ」)であり、文字言語ならではの表現法と言える。この(6)は、もとの語(「おしゃれ」)とその語頭に当てられた漢字(「汚」)との間に意味的な関連性はなく、むしろ対照的な組み合わせとなっているため、相反型と言える。

また、接頭辞の「お」と重なる読みを持つ「汚」は、接辞のようにも使える可能性があるため、(5)の「漢字(んな)」とは対照的に適用範囲が広いことが予想される。実際、Web 上では、「お料理」を「汚料理」と書いて料理の見た目の悪さなどを意味するものなど、「汚」を接頭辞のように用いた用例も散見される。ただし、本稿ではもとの語が一語のものを扱っており、また、漢字変換後の「汚料理」のような表記語には文字種の混在はないため、ここではその紹介に留めていく。

以上のとおり、①のタイプでは、漢字表記を持たない副詞や形容詞類の和語を中心に、共起型を除く、3 つの意味的な関連性の型による用例が確認された。今回は、語内の漢字の配置は語頭に多く見られたが、語末にそれが配される例は確認できず、語中に漢字が現れる例も畳語において 1 例を見るだけに留まった。また、漢字(二字漢語)の汎用性の面では、「肝心(かんじん)な」の「かんじ」の部分に用いられた 3 拍の読みを持つ「漢字(かんじ)」がそれ以外の語に用いられにくい一方で、「多(た)」や「汚(お)」のように 1 拍という短い拍数の音の漢字は適用範囲が広いと考えられた。特に「汚」は接頭辞のようにも使えるため、よりその範囲が広い可能性がある。このことは、たとえば、すでに接頭辞が不可分な要素となり、これを含めて一語として扱われている「おしゃべり」のような語などにおいて、この種の交ぜ書き(この場合、「汚しやべり」)が生じ得るといった予測にもとづいた探索を可能にする。無論、一語に限定しなければ、より多くの語で接頭辞のように用いられている例を見出せると思われる。

## ②漢字／カタカナ形

このタイプは、外来語やカタカナ語を中心に、新交ぜ書き語において比較的幅広い用例が見られるものである。この②には、もとの語が、ひらがな表記語(たとえば「おしゃれ」など)やアルファベット表記語(たとえば「fantastic」など)がカタカナで

書かれたもの（たとえば「オシャレ」や「ファンタスティック」など）まで含まれていることがその一因と思われる。したがって、総じて最もバリエーションがあり、その意味では新交ぜ書きの中心的な形態とも言える。

次の(7)は、この②のタイプにおける重複型の用例である。

(7) 美ユーティフルですう ♪(㊤㊤㊤) ♪

美しい〜 ♪(㊤㊤㊤) ♪おめめもパッチリ

( ^ O ^ ☆ ♪ポーズもパッチリ☆\*:。.

o(≧▽≦)o ..: ☆

これは「ビューティフル」という形容動詞（ナ形容詞）の語頭に、その語の意味と重なる語義の漢字（「美」）を当てた用例である。使用されている文脈からも、描写対象の容姿端麗な様子を、「美ユーティフル」という表記語によって表現しようとしていると思われる。また、漢字（「美」）と拗音の小書き文字（「ユ」）の結合も生じているため、後述の③のタイプには置き換えにくいという制限もある。

次も形容動詞（ナ形容詞）だが、用いられる漢字は二字漢語となっている。

(8) 「〔中略〕『不安タスティック』も同様、不安こそが何かを始める原動力になるのではと、ここも自分洗脳をね。〔中略〕」

(8) では、「不安」という、本来はネガティブな意味のことばが、「素晴らしい」といった、ポジティブな意味を持つ「ファンタスティック」という語の影響で中和されている。このことから相反型と考えられる。この用例では、語頭に配した「不安」ということばを押し出しながらも、「不安タスティック」という語全体としては比較的ポジティブな意味が発揮されていることが窺える。

この②のタイプは、その性質上、もともと漢字表記のない外来語やカタカナ表記語を中心に見られる形態であるため、下のように、名詞などを含め、比較的品詞に関わらず新交ぜ書きが用いられやすいようである。

(9) 今月の Can 買い♥アイ愛テム<sup>(3)</sup>

これは、「アイテム」の語頭の「アイ」をそれと同じ音を持つ「愛」に変えることで、「アイテム」という名詞に「愛用する」や「愛でる」などの意味を掛け合わせた用法である。つまり「アイ」と「愛」の音の類似性を利用し、本来は関係のない漢字をもとの語に組み合わせた自由型の用法である。これも「愛テム」という一語の表記で、「愛用している品物」といった語句のような意味が表現されている。

もちろん重複型のように、「アイテム」の語義と重なる字義を持つ漢字を使用するな

ら、「品物」などの漢字が当てられることになるが、「品」や「物」のどちらも「アイテム」と読みの類似性が認められないため、これらの漢字によって「アイテム」を交ぜ書きすることは難しいと思われる。つまり、このことは語（の読み）によって用いられる型に影響があることを示唆している。反対に、音の類似性を満たしていれば、意味的な関連性にとらわれずに自由な漢字選択が可能となるため、(9)では、意味的には「アイテム」とは関係ないが、音の類似性は認められる「愛」という漢字を用い、「愛テム」という2つの意味が組み合わさった表現が生まれている。

音韻的な類似性のもとで、こうした自由な漢字選択が可能なことは、次の2つの用例からも窺える。これらの用例では、「ビジュアル」という名詞の語頭部分がそれぞれ異なる漢字で表記されている。

(10) メキシコ発！南国の情熱あふれる美ジュアルを堪能ください♥

(11) INO も、大きく分ければV系かもしれないけど、SUSSY 曰く  
『俺たちの場合、ビジュアル系のビは、微妙の微だ！』  
ってことだから「微ジュアル系」(笑)。

(10)では、もとの語（「ビジュアル」）と漢字（「美」）との間に意味的な重複はないが、比較的もとの語とともに使用されやすい字義を持つ漢字が当てられた共起型の用法と言える。この用例では、「ビジュアル」の語頭部分（「ビ」）が、それと同じ音を持つ「美」に変えられている。これにより、「美ジュアル」は「美しい見た目」といった意味を示し、しばしば「ビジュアル」とともに用いられやすい「美しい」などの語の意味まで一語で表現する表記語となっている。

一方、(11)は、同じ語であっても、書き手の伝えたい事柄に応じて別の漢字を用いることも可能であることを示す用例と言える。この(11)も(10)と同様、「ビジュアル」という語をもとにしているが、そこに用いられている漢字は「美」ではなく、「微」である。この「微ジュアル」という表記語では、婉曲的にネガティブなニュアンスを加えて「ビジュアル系」に満たない様子、あるいは「やや」などの意味で「微」が用いられていると思われる。この用例では、「微妙」という意味で「微」が用いられているが、この二字漢語を意図した「微」という漢字と「ビジュアル」には意味的な関連性はないため、自由型と言える。また、この用例から、語中に充当された漢字が「微」（＝微妙）のように多義的である場合、その表記語（ここでは「微ジュアル」）の意味も多義的になることが示唆される。

上ではいくつか「美」を用いた例が見られたが、もちろんそれとは対照的な意味の漢字が用いられることもある。次は、②においても、上で取り上げた「汚」という漢字が用いられた例である。

(12) 最近は芸能人のインスタが度々話題に上りますが、新しい流行を生み出すことが仕事の一部といえる彼らにとっては「オシャレ」でも、一般人には



「汚シヤレ」と感ずる場合だつてあるんです。

上の(6)はひらがな表記の「おしやれな」を「汚しやれな」とした例であつたが、(12)では、カタカナ表記の「オシヤレ」の語頭に「汚」が用いられ、「汚シヤレ」とされている。(6)と(12)の用例は文字種や語尾の有無など、形態的には異なるが、ともに形容動詞(ナ形容詞)であり、この2つの表記語の基本的な意味は同じと考えられる。よつて、これも相反型の用法となる。この②のタイプは外来語やカタカナ語だけでなく、こうした通俗的なカタカナ表記による和語においても用いられる。

こうして見てくると、この種の交ぜ書きは、概して漢字表記は語頭に現れやすいようであるが、次のように、語頭部分の読み方をする適当な漢字がなく、語末部分の読み方をする漢字がある場合はその限りではない。

(13) 自由が丘つてまじでタピオカしかないじゃん、もうタピ丘でよくね？

この用例では、「タピオカ」という名詞の語末部分の「オカ」のほうに「丘」という漢字が用いられている。また、文脈からこの漢字は、タピオカ店の多い「自由が丘」を表したものであることもわかる。ただし、一般的に「タピオカ」と「丘」(＝自由が丘)との間に関連性はないため、自由型と言える。

以上のとおり、この②は、その形態的な特徴から外来語やカタカナ語が中心ではあるとはいえ、語種や品詞などにおいては比較的適用範囲が広いものであつた。そうした生産的な特徴を有するため、新交ぜ書き語における漢字使用の多様性も顕在化された。同じ語であつても、それに用いられる漢字にはバリエーションがあり、上では、「ビジュアル」が、「美ジュアル」や「微ジュアル」のように、別の漢字が当てられ、それぞれ異なつた意味で表記される例も見られた。

### ③漢字／アルファベット形

カタカナとアルファベットという、もとの語の表記の仕方に違いはあるが、このタイプは、上の②にも現れる語と同様の語を中心に見られるものである。その意味では付随的であるため、②のタイプほどのバリエーションはないが、その漢字アルファベット交じりの語表記は、3つのタイプのなかでも最も形態的な特異さを放つていけると言える。

次は(10)で見た用例の③のタイプによるものである。なお、今回の調査では、このタイプにおける(11)の「微ジュアル」に相当する用例は確認できなかった。

(14) 美ジュアル / 美 SUAL

美と Visual の組み合わせになります。

「美しい見ため」の意味合ひで提案致します。

(14) は、外国語<sup>(4)</sup>の「VISUAL (Visual)」という名詞の語頭を漢字に変え、「美SUAL」と表記された用例である。前掲の「美ジュアル」もこの表記語とともに併記されている。この「美SUAL」も、(10)の「美ジュアル」と同様、「美しい見た目」といった意味の共起型の用法であり、両者の最も大きな違いは形態的な点にあると言える。

次の2つも、②に見られた用例の③のタイプに該当するものである。

- (15) どんなに大変な状況下でも、辛いことを笑いで昇華する人たちの強さに少し元気付けられた。

不安 tastic...

- (16) 私が 12 年前に仕事についての愛用品で、修理を何回も重ねて未だに現役で頑張ってもらっています。他にもいろんな工具がありますが、僕にとっての欠かせない愛 temです。

(15) は、外国語の「fantastic」という形容詞の語頭部分を「不安」という漢字に変えた相反型の例である。「素晴らしい」といった「fantastic」の意味を残しながら、語頭に漢字表記に配した「不安 tastic」という一語によって、不安定な社会状況に関する文脈のなかでの出来事や心情が端的に示されている。この表記語では、(8)と同様、「不安」というネガティブなことばが、もとの「fantastic」の持つ語感によって中和されていることが窺える。

一方、(16) は外国語の「item」という名詞の語頭を漢字(「愛」)に変えて、「愛 tem」とした自由型の用例である。文脈から「愛用品」という意味で用いられていることがわかる。形態的な違いはあるが、(9)の「愛テム」と同様の意味の表記語と言える。

今回の調査で見られたこの③のタイプは、②で用いられる外来語やカタカナ語が原語のつづり(アルファベット)のままで表記された語に対して漢字を当てた用例だけであった。そのため、主として②の一部がこのタイプでも併用されていると考えられるが、今後、より広範囲を調査することによって、和語などをローマ字でつづった用例も確認できると思われる。

このように用例を観察していると、外来語・カタカナ語にしても、外国語にしても、新交ぜ書きで用いられるもとの語は、多くの日本人が理解している語彙が占めているようである。ただし、もとの語の認知度が高くても、その文字列(つづり)が短い場合、新交ぜ書きは用いられにくいことも窺えた。たとえば、今回は「now」を「無w」にするような例は見受けられなかった。したがって、概して新交ぜ書きでは、それが用いられるためのもとの語の条件として、その認知度の高さに加えて、語形に関わる要素としては、音節数や拍数という音声的な要素よりも、文字数という視覚的な要素

のほうを挙げることができるのかもしれない。これは、もとの語のつづりが短い場合、その一部を漢字表記にすることによって、もとの語形がわからなくなるのを避けようとするためだと思われる。こうしたことから、あらためてこの種の交ぜ書きが、あくまでもとの語の意味を保存しながら、そこに漢字の意味を加えようとする性格のものであることを窺い知ることができる。

他方、今回の調査では、意味的な関連性の型が4つとも確認できたのは、②の「漢字／カタカナ形」だけであり、①の「漢字／ひらがな形」では共起型は見られず、また、③の「漢字／アルファベット形」では重複型が確認できなかった。語種の面では、基本的に①は和語を中心として、②は主として外来語やカタカナ語、③は外国語において見られた。品詞別の頻度からは、①は副詞や形容詞類に多く、②と③は形容詞類や名詞においてしばしば確認された。また、漢字は語頭に配されやすい傾向があり、今回、語中と語末に現れた漢字はわずかに1例ずつ確認されただけであった。これらについては、本節のまとめとして表1に示しておく。

表1 新交ぜ書き語の分布の様相

番号	用例	型	語種	品詞	位置	形態
(1)	多っぷり	重複型	和語	副詞	語頭	漢字／ひらがな形
(2)	湧く湧く	重複型	和語	副詞	語頭・語中	
(3)	粒らな	自由型	和語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	
(4)	鬱くしい	相反型	和語	形容詞 (イ形容詞)	語頭	
(5)	漢字んな	自由型	漢語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	
(6)	汚しやれな	相反型	和語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	
(7)	美ューティフル	重複型	外来語・カタカナ語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	漢字／カタカナ形
(8)	不安タスティック	相反型	外来語・カタカナ語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	
(9)	愛テム	自由型	外来語・カタカナ語	名詞	語頭	
(10)	美ジュアル	共起型	外来語・カタカナ語	名詞	語頭	
(11)	微ジュアル	自由型	外来語・カタカナ語	名詞	語頭	
(12)	汚シャレ	相反型	和語	形容動詞 (ナ形容詞)	語頭	
(13)	タピ丘	自由型	外来語・カタカナ語	名詞	語末	
(14)	美SUAL	共起型	外国語	名詞	語頭	ベアルトフア 漢字／
(15)	不安tastic	相反型	外国語	形容詞	語頭	
(16)	愛tem	自由型	外国語	名詞	語頭	

## 5. 総合考察

以上のように、新交ぜ書き語が文字（列）の表音性と表意性を用いることでなされた創造的な表記語であることに鑑み、最後に、そうした創造性に富むことば遊びにおける修辭的な側面や、ことば遊びによる造語的な側面からこの表記法について検討を加える。そして、今後のより発展的な研究を見据え、ことば遊びにおける言語表現の産出過程に関する認知意味論的な知見をもとに、新交ぜ書き語のそれについて考究する。

山梨 (2009, p.195) は、「駄洒落、ジョーク、パロディーなどの言葉による遊びは、日常生活を楽しむための重要な手段であり、この種の言葉の使用のなかに、言葉の創造性と新たな意味の可能性をかいま見ることができる」としている。こうしたことばの創造的な修辞法としては「掛詞」がある。尼ヶ崎 (1994, p.163) によれば、掛詞は、お互いの関連性の有無に関わらず、句同士を音の類似性によって結びつけることで、意味的にも「一語二役」(同上, pp.147-151) の働きをするという。「駄洒落」にもこれと同じような側面がある。駄洒落とは、「一つの音構成に複数の意味を持たせる修辞技法」(中村, 2008, p.23) のことであり、これも掛詞と同様に「同音異義を利用して一語に二重の意味をこめるという、同じ仕組みで成り立っている」(尼ヶ崎, 前掲書, p.142) ものである。前掲の中村 (2008, p.8) では、「猿トル」や「ユニバー猿」のように(ともに傍点は省略)、語の一部を漢字に変えたものなども駄洒落の例として挙げられている。このことから、本稿で取り上げた新交ぜ書き語もこの種のことば遊びの1つと考えられ、それをとりわけ表記の側面から捉えたものとも言えるだろう。

漢字が、語や句ではなく、文字でありながら、新交ぜ書きにおいて、駄洒落などのようにもとの語と協同的に複数の意味を表すことに貢献できるのは、その有する、語の読みと意味を表す表語文字としての機能によるところが大きいと考えられる。本稿で取り上げた用例は、こうした漢字の性質によるものであり、音(読み)の類似性を利用して語の一部に置き換えられた漢字が、自身の字義により、その語に新たな意味をつけ加えることで生まれた文字表現と言える。ただし、この種の交ぜ書き語は、一語二役というよりは、その文字面を利用して、一語で語句のように複合的な意味を表す性格が強いものと言える。

こうした性質ゆえ、この文字表現は造語的な側面も有している。米川 (1992, p.55) では、既存語を利用した造語法として借用、省略、転倒、混淆のほか、文字による造語法が挙げられており、「しんにゅう社員」などがそれに当たるとされている。これは、「迷ってばかりいる」「遅刻してばかりいる」「遊んでばかりいる」「避けてばかりいる」の漢字に共通する「しんにゅう(じゅ)」と「新入」を掛けた造語だという(同上, 同頁)。この例では、新たな語形を作り出すわけではなく、もとの語形を維持しながら、その文字面によって新たな意味の語を生み出していることがわかる。このような観点からは、漢字を交ぜることによって生じた上の用例も文字による造語の一種とも言えるだろう。実際、上で挙げた「不安タスティック」なども造語として扱われている(『東京新聞』, 2021年1月1日付朝刊)。

文字のなかでもとりわけ漢字の造語力についてはしばしば論じられているが、湯沢 (2017) は、実際に語を作り出しているのは漢字の持つ「一定の「義」を担った「音」つまり字音ないし字訓であり音声である」(p.131) としている。つまり、漢字の「音」が「強い造語力を持っている」(同上, pp.131-132) のだという。新交ぜ書きが造語性を備えているのは、こうした漢字の「音」を利用した文字表現であるためではないかと考えられる。また、同書 (pp.198-199) では、「愛顧」や「愛好」など、自身を語の一部に持つことの多い「愛」などの漢字は「かなり強い造語力を持っている」としており、この観点からは、新交ぜ書きにおいても、比較的適用されやすい漢字があることが示唆される。たとえば、上の見た「美」は、音の類似性により複数の表記形態に

おいていくつかの語と結合しており、その振る舞いは、二字漢語の造成において中心的な役割を果たす「軸字」(佐藤ほか, 1996, pp.91-92)のそれに近い。同一の語ではあったとはいえ、表記形態の違いを超えて現れた「汚」も同様であろう。もちろん新交ぜ書き語は二字漢語ではないが、「軸字」の概念をより広義的に捉えるなら、この表記語においても、「軸度」(同上, 同頁)の高い、すなわち、多くの語の造成に関わることが可能な漢字があることが示唆される。無論、新交ぜ書きではその性質上、軸字のような働きを見せる漢字についても比較的平易であることが求められる。

このように、新交ぜ書きが、語と漢字を利用して一語に複数の意味を掛け合わせるという、ことば遊び的で造語性のある文字表現であることを勘案すると、ことば遊びにおける言語表現の産出に関する認知プロセスの枠組みを応用することで、この種の表記語が産出される過程についても一定の示唆が得られると考えられる。実際、山梨(2012)は、そうした「スキーマ化と事例化の認知プロセスは、言葉遊びの創造性において重要な役割を担っている」(p.155)としている。そこで最後に、「ビジュアル」を「美ジュアル」や「微ジュアル」と表記していた前掲の用例を例として、スキーマ化と事例化の認知プロセスの観点から、新交ぜ書き語の産出過程について考察を試みたい。

山梨(2012, pp.154-155)では、「マッハ・ムカつく」や「チョー・ムカつく」を例にして、ことば遊び的な言語表現の産出過程が示されている。同書によれば、まず「非常にムカつく」の「非常に」の部分を変項(X)としてスキーマ化され、次にそのスキーマのXに新たな語(「マッハ」)を当てはめて事例化されることで新たな表現(「マッハムカつく」)が作り出されているという。この仕組みは基本的に、「チョー・ムカつく」という表現においても同様だという。この山梨(2012)の示すことば遊びの産出過程の枠組みを援用するなら、「美ジュアル」や「微ジュアル」は、「ビジュアル」の「ビ」の部分を変項としてスキーマ化され、そこに音韻的な類似性の認められる読みを持つ「美」や「微」などの漢字が充当されることで事例化されていると考えられる。すなわち、この種の表記語はもとの語の任意の箇所を変項(X)とし、音韻的に許容される範囲において、その箇所を漢字と入れ替えることで産出されているものと言える。

図1は、山梨(同上, p.155)を参考に、こうした産出過程を図式化したものである。Xに充当される漢字に要求される音韻は、もとの語形やXの位置によって変化するものであり、図のように、語頭の「ビ」をXとした「ビジュアル」の拡張表現を産出する漢字には、[bi]と同一、または類似した読み(音)を持つことが求められる。新交ぜ書きは、こうした音韻的な制約を有しているとはいえ、決まった語や漢字が用いられるわけではないため、一見無秩序になされたものに思えるが、このように産出過程を考究することにより、その基本的な仕組みが垣間見ることがわかる。

以上のとおり、新交ぜ書きは、修辭的な言語表現への動機づけのもとで、その書き手にとって表現したい内容と意味的に合致する比較的平易な漢字が見つかった場合において、上述のような過程を経て任意に用いられる表記法だと考えられる。

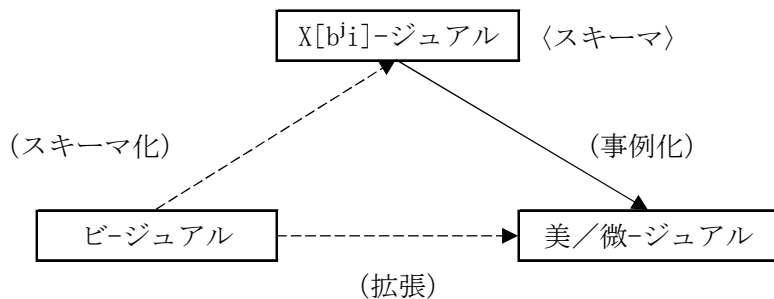


図1 新交ぜ書き語における拡張表現の産出過程

## 6. まとめ

新交ぜ書き語は、文字の組み合わせの面から、「漢字／ひらがな形」、「漢字／カタカナ形」、「漢字／アルファベット形」という3つの形態に分けられ、意味的な関連性の面からは、この表記語には、重複型、共起型、相反型、自由型という4つの型が存在することがわかった。ただし、後者については、今回の調査においてすべての型が確認できたのは「漢字／カタカナ形」だけであり、「漢字／ひらがな形」では共起型は見られず、また、「漢字／アルファベット形」では重複型は見られなかった。

いずれの型の表記語であっても、漢字表記を交ぜることで、語義と字義が重なったり、別の意味（字義）が添加されたりするなど、意味的な多重性が認められるものであった。つまり、それは、表記の工夫によって一語で複数の意味を表現し、語句のような機能をもたらす文字表現であることを意味している。このような文字表現ならではの長は、ことば遊びにおける修辞法、あるいは、ことば遊びによる造語法として貢献するものでもある。

その背景にあるのが、1つの字が1つの語を表すという表語文字としての漢字の機能であることは言うまでもない。表語文字の漢字は、もとの語形の一部と自身の読み（音）の類似性を利用して、その語と結びつくことを可能にしていた。この性質が、駄洒落などのような修辞法として用いられたり、文字による造語法として用いられしたりしているのである。こうして新たな表記語を作り出す漢字のなかには軸度の高いもの、すなわち軸字となり得るものが存在する可能性もあった。とりわけ自由型などでは、同一の語の同一箇所に対して、それと同じ音を持つ同音異字の漢字を使用しやすいため、書き手の創意工夫により、文脈等に応じた多様な組み合わせが可能であることが窺えた。

そして、新交ぜ書きにはゆるやかな傾向があることも観察された。たとえば、漢字の配置は語頭のほうが多いこともその1つである。これには、もとの語形と漢字の読みとの兼ね合いがあることも一因に挙げられよう。加えて、読み方の類似性を媒介とした語と漢字の関係性によって、用いられる型が限定される可能性もあった。また、この表記語はもとの語の意味を残そうとする特徴があるため、もとの語形が推測できる程度の残存箇所が要求される。そのため、多くの場合、ある程度の長さの語形を持つ語が用いられ、その一部が漢字に置き換えられたあとも数文字分の文字列を残して

いた。外国語の場合も含めて、この種の交ぜ書きに使用される語が広く知られた語であったのも、また、用いられる漢字が比較的平易なものであったのも、こうした性格による影響があると考えられる。

この新交ぜ書きが、もとの語と漢字の音韻的な類似性によってなされているとはいえ、その漢字の使用の仕方については混沌としていた。しかしながら、意味的な重なり方によってある程度の類型化が可能であることが示されたことで、その体系性を垣間見ることができた。また、この表記法について、認知意味論的な観点から考察することによって、この種の表記語が、語の任意の箇所を変項としてスキーマ化され、そこに音韻的に同じ、または類似した読みを持つ漢字が充当されることで事例化している拡張表現であることや、そうした基本的な産出過程が示されたことは、今後のより発展的な研究への足掛かりとなり得るものであろう。

一方で、実際のところ、この類の新たな交ぜ書きが、漢字を用いたものだけではないという事実は、今後の課題を示すものである。たとえば、「うれC（うれしい）」や「素晴ら sea（素晴らしい）」のように、語の一部に対して積極的にアルファベットやアルファベット表記語を当てる用例も散見されており、この種の表記法の全体像を解明するには、漢字だけでなく、他の文字種を用いた用例についても扱っていく必要があると考えられる。また、上述のとおり、「老いるショック」（『東京新聞』、2021年1月1日付朝刊）と表記して、もとの「オイルショック」の語感を残しながら、それとは異なった意味を示す表現も見られる。今後はこのような複合語の類も視野に入れることで、新交ぜ書きの特徴が解明されていくと思われる。

いずれにせよ、新交ぜ書きは、もとの語と漢字との音韻的な類似性を使用することで生まれた、ことば遊び的な独特の表記法であり、音声言語では味わえない文字ならではの言語表現と言える。文字言語ならではの言語表現は、殊に比較的小だけた表現の多い文字媒体のメディア、たとえば雑誌やライトノベル、Web などにおいては、書き手の表現を支える手段の1つとなると考えられる。その造語性も相まって、今後も様々な用例が現れてくるに違いない。

#### 【注】

- (1) ローマ字とは、「アルファベット（すなわち ABC 以下 Z に至る二六字母）のこと」（日下部、1977, p. 343）であるため、取り立てて両者の区別を明示しない、あるいは明示する必要がない場合も少なくないと思われる。しかし、本論で取り上げた用例は、「ローマ字のつづり方」にもとづくものではなく、原語（英語）のつづり方に準じて表記されたもののみであったため、「ヘボン式ローマ字」など、ローマ字のつづり方に焦点が置かれている場合を除いて、本稿では「ローマ字」ではなく、「アルファベット」という用語を用いている。これは、「ローマ字」を「ヘボン式ローマ字」や「訓令式ローマ字」を指すものとし、「アルファベット表記」を「西洋系外国語の原綴りのこと」とする伊藤（2001, p. 123）の考え方とほぼ同一のものと思われる。
- (2) 原典では、この箇所は他の箇所よりも相対的に大きなサイズで記されているが、ここでは論文の体裁上、文字サイズは統一している。
- (3) 原典では、ルビを除いてすべて白抜き文字となっているが、ここでは論文の体裁に合わせて通常のスタイルの文字で記している。



- (4) 伊藤 (2001, p. 123) は、「仮名かローマ字で表記された外国出自の単語」は外来語、「アルファベット表記された外国出自の単語」は外国語という、語の表記の仕方によって容易に判定できる基準を提示しており、本稿ではこれに従って両者を区別している。なお、この伊藤 (2001) のいう「ローマ字」と「アルファベット表記」の使い分けについては、注釈 (1) を参考にされたい。

#### 【引用文献】

- 尼ヶ崎彬 (1994) 『日本のレトリック』 筑摩書房
- 伊藤雅光 (2001) 「ポップス系流行歌謡の語彙調査における外来語と外国語の判定基準」『計量国語学』 23(2), pp. 110-130, 計量国語学会
- 樺島忠夫・続木敏郎・関口泰次 (編) (1985) 『事典日本の文字』 大修館書店
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂
- 日下部文夫 (1977) 「日本のローマ字」『岩波講座日本語8 文字』 岩波書店
- 笹原宏之 (2010) 『当て字・当て読み 漢字表現辞典』 三省堂
- 佐藤喜代治・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・飛田良文・前田富祺・村上雅孝 (編) (1996) 『漢字百科大事典』 明治書院
- 田部井文雄 (2006) 『「完璧」はなぜ「完ぺき」と書くのかーこれでいいのか? 交ぜ書き語ー』 大修館書店
- 中村明 (2008) 『笑いの日本語事典』 筑摩書房
- 前田富祺・阿辻哲次 (編) (2009) 『漢字キーワード事典』 朝倉書店
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論一文法のゲシュタルト性ー』 大修館書店
- (2012) 『認知意味論研究』 研究社
- 湯沢質幸 (2017) 『漢字は日本でどう生きてきたか』 開拓社
- 米川明彦 (1992) 「新語と造語力」『日本語学』 11(5), pp. 50-57, 明治書院
- 「みうらじゅんのグレイト余生」『東京新聞』 (2021 年 1 月 1 日付朝刊)

#### 【用例出典】

- (1) 小麦ちゃん🌾のひとやすみ (2012 年 8 月 8 日) 「夏限定! チキンのスパイスサラダピタ」 「ティンカーベルのおうち」  
<http://tinkerbell.chesuto.jp/e859759.html> (2021 年 1 月 27 日閲覧)
- (2) 「《湧く湧くマガジン》」 「note」  
[https://note.com/jinriki\\_wakuwaku/m/m21d2f58ed122](https://note.com/jinriki_wakuwaku/m/m21d2f58ed122) (2021 年 1 月 27 日閲覧)
- (3) 「186」 「300DOORS」  
[https://archives.iwf.jp/300sche/category\\_14/item\\_186.html](https://archives.iwf.jp/300sche/category_14/item_186.html) (2021 年 1 月 27 日閲覧)
- (4) M.M/ビジネスタイムライン編集部 (2015 年 12 月 18 日) 「毒々しいまでに鬱かしい。人形作家 清水真理が魅せる球体関節人形の世界」 「クリエイティブ経済誌 BUSINESS TIMELINE-」  
[https://businesstimeline.jp/btl/companies/timeline\\_woman/334](https://businesstimeline.jp/btl/companies/timeline_woman/334) (2021 年 1 月 27 日閲覧)
- (5) 前田安正・桑田真 (2010) 『漢字んな話』 三省堂, p. 4
- (6) 「「今更」のだめカンタービレ」 (2008 年 1 月 4 日) 「InteriorArena」  
<http://linecontrol.jugem.jp/?eid=453> (2021 年 1 月 27 日閲覧)
- (7) ANCOS (2019 年 4 月 6 日) 「美ユーティフルですう ♪(๑~๑) ♪」 「AncoS-アンコーズ」

<https://dog-trimming-ancos.com/4053/> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(8) 「みうらじゅんのグレイト余生」『東京新聞』(2021 年 1 月 1 日付朝刊)

(9) 『CanCam』(2014 年 9 月号) 小学館, p. 34

(10) 「人気のメキシコ発！インパクト抜群カクテル！？」「HOTEL W」

<https://w-hotels.net/2020/06/25/人気のメキシコ発！インパクト抜群カクテル！？/> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(11) 「INO HEAD PARK@HOLIDAY 大阪」(2007 年 6 月 4 日)「徒然なるままに・・・時の狭間で。」

[https://blog.goo.ne.jp/chaos\\_to\\_grase/e/bcb90bac17f721b32a46d360d620a129](https://blog.goo.ne.jp/chaos_to_grase/e/bcb90bac17f721b32a46d360d620a129)

(2021 年 1 月 27 日閲覧)

(12) 成瀬いづみ／ハウコレ (2015 年 6 月 23 日)「ええ、オシャレのつもり！？モテを遠ざける「女子の汚シヤレ」とは・4選」「ハウコレ」

<https://howcollect.jp/article/12370> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(13) Engineetori (2019 年 6 月 3 日)「自由が丘ってまじでタピオカしかないじゃん、もうタピ丘でよくね？」「Twitter」

<https://twitter.com/Engineetori/status/1135442759026798592> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(14) 「男性向けメディアの「サイト名」のネーミングのお仕事」「クラウドワークス」

<https://crowdworks.jp/public/jobs/3341657> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(15) Alico (2020 年 2 月 25 日)「【生活】不安を “ふあん”タスティックに」「Alico Photo」

<https://alico777.hatenablog.com/entry/2020/02/25/060038> (2021 年 1 月 27 日閲覧)

(16) 「青年部だより」(2017 年 1 月・2 月号)

<https://tonami-yeg.jp/tayori/kh170101.pdf> (2021 年 1 月 27 日閲覧)